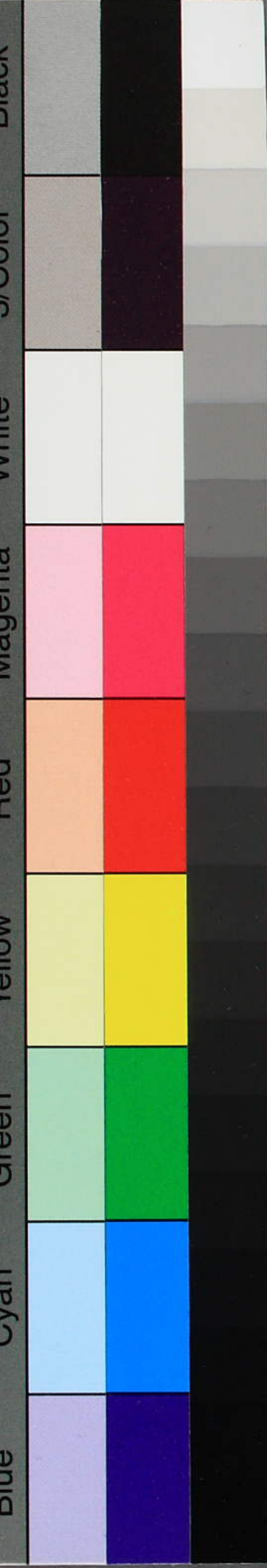


山谷集

土屋文明著  
岩波書店刊



山谷集

土屋文明著



岩波書店

¥ 1.50

山谷集

土屋文明著  
岩波書店刊

山谷集

土屋文明著



岩波書店



山谷集

山谷集

土屋文明著

土屋文明著  
岩波書店刊



岩波書店



山

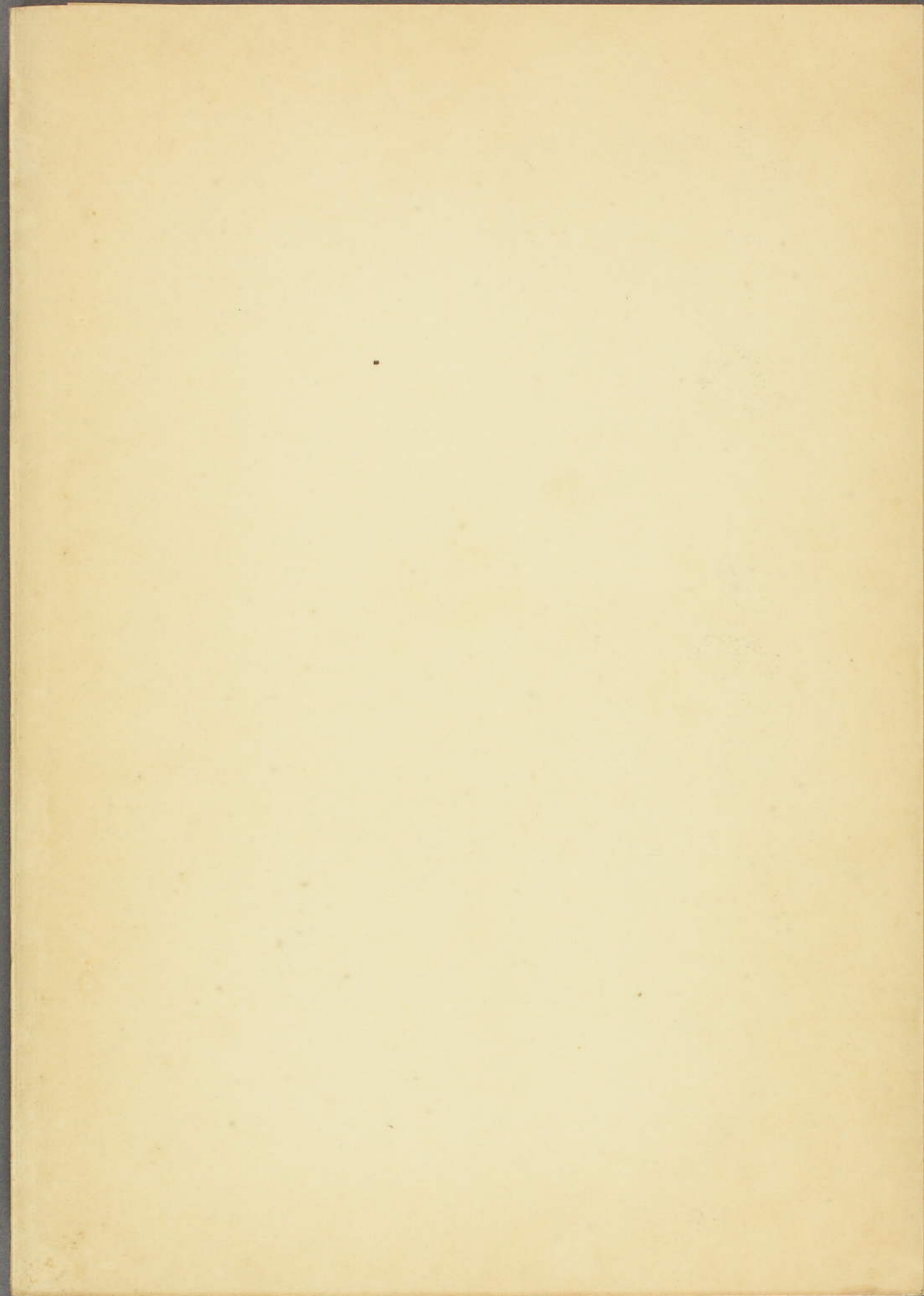
谷

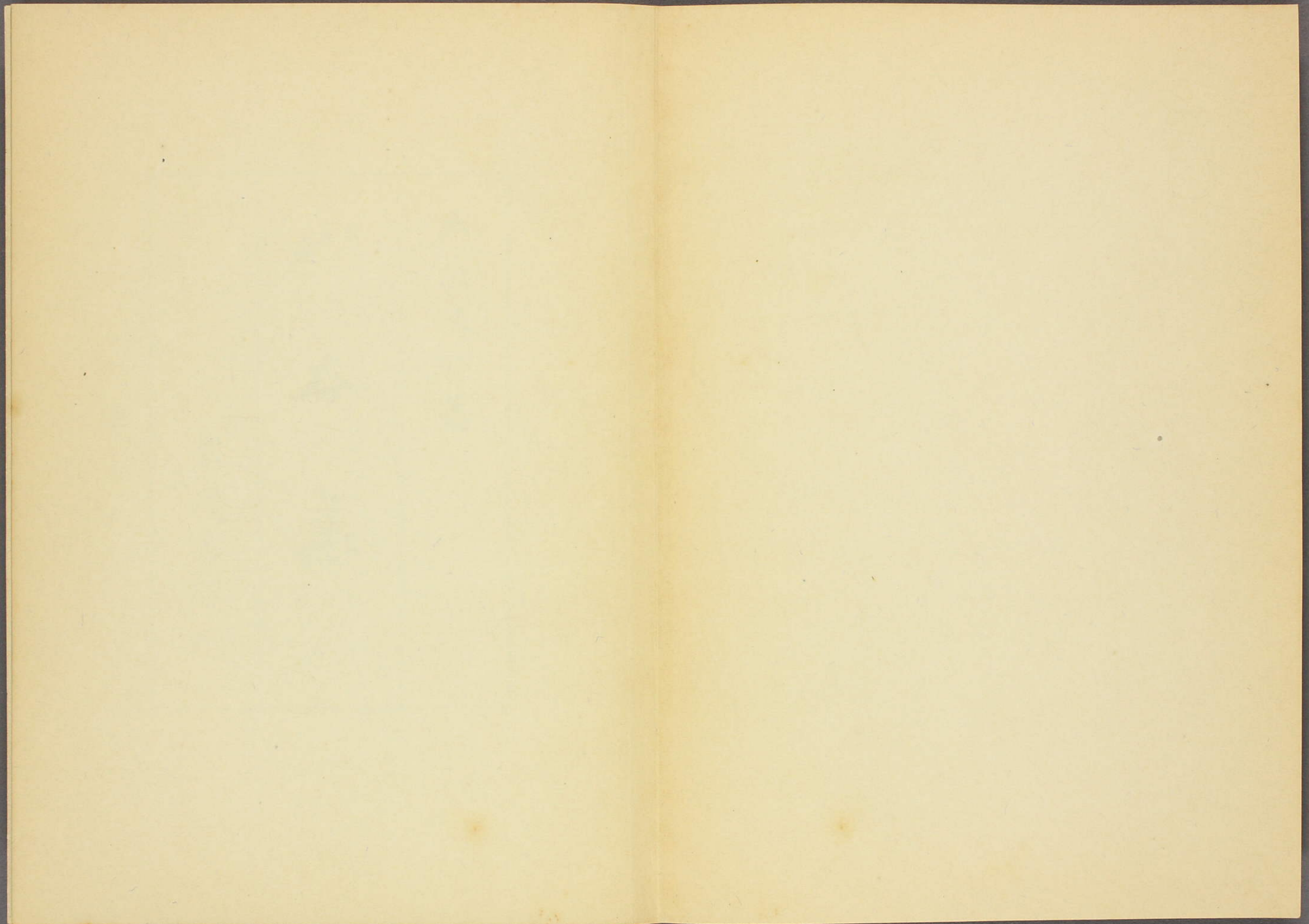
集



山谷集

土屋文明著





土屋文明著

山谷集

岩波書店刊

土屋文明著

山谷集

岩波書店刊

歌集  
山  
谷  
集

歌集  
山谷集  
卷之...



山 谷 集

目 次

題簽・扉 (齋藤茂吉氏)

昭和五年

歳晚 (アララギ一月號) .....	一
月島 (アララギ二月號) .....	三
浅草 (つばさ創刊號) .....	五
玉川 (キング六月號) .....	六
某君を弔す (アララギ五月號) .....	八

悼加納曉氏 (アララギ六月號) ..... 一〇

五月十一日雲水寺 ..... 一二

夏來る (アララギ七月號) ..... 一三

夏日勞作 (アララギ八月號) ..... 一五

六甲山 (雄辯二月號) ..... 一七

鵜原 (婦人公論九月號) ..... 二〇

嵯峨にて (週刊朝日) ..... 二二

那須殺生石 (短歌雜誌十月號) ..... 二四

高野山安居會 (短歌月刊十月號) ..... 二七

吉野 (つばさ十一月號) ..... 二九

とくとくの清水 ..... 二九

竹林院 ..... 三一

丹生川上上の社 ..... 三二

下野芦野 (アララギ十二月號) ..... 三三

八月十六日 (アララギ九月號) ..... 三四

秋來る (アララギ十月號) ..... 三七

龜井戸 (アララギ十一月號) ..... 三九

信州山田溫泉 (文藝春秋昭和二年六月號) ..... 四〇

昭和六年

北蝦夷 (アララギ一月號二月號) ..... 四三

津輕海峽 ..... 四三



函館五稜郭……………四五

石狩川……………四六

狩勝峠……………四七

釧路に至る……………四九

根室……………五〇

樺戸……………五三

辛未新春賦 (日本新聞)……………五六

福島竹治郎君を (アララギ三月號)……………五八

小坪の濱 (アララギ四月號)……………五九

三月三十一日 (アララギ五月號)……………六一

立會川 (アララギ六月號)……………六四

富士見左千夫赤彦追悼歌會 (アララギ七月號)……………六七

某日 (アララギ八月號)……………六九

八月一日 (アララギ九月號)……………七〇

屋上栽草 (アララギ十月號)……………七三

信州靈泉寺 (アララギ十一月號)……………七六

レントゲン診察 (アララギ十一月號)……………七八

高木村 (アララギ十二月號)……………八〇

夏蕨 (短歌月刊七月號)……………八一

松本 (アララギ十二月號)……………八四

昭和七年

辛未歲晚 (アララギ一月號) ..... 八六

眞鶴岬 (讀賣新聞) ..... 九一

加賀那谷 (アララギ七月號) ..... 九二

伊良湖崎 (短歌研究十月號) ..... 九四

高野山 (日本短歌十一月號) ..... 九七

時事雜誌 (文藝春秋四月號、法政大學新聞、日本新聞) ..... 一〇〇

久保田健次氏戰報 (アララギ七月號) ..... 一〇六

轉居 (短歌春秋二月號、アララギ二月號) ..... 一〇八

熱海 (アララギ三月號) ..... 一一〇

雜誌 (アララギ四月號、五月號) ..... 一一二

四月二十三日萬葉集年表製本成る ..... 一一三

月島 (アララギ六月號) ..... 一一四

秋冬雜誌 (アララギ八月號、九月號、十月號、十一月號) ..... 一一六

秋風 (短歌研究十一月號) ..... 一二一

服藥久し (アララギ十二月號) ..... 一二四

昭和八年

逗子にて (改造一月號) ..... 一二五

城東區 (短歌研究新年號) ..... 一二八

日向青島 (短歌研究三月號) ..... 一三二

鹿兒島 (アララギ五月號) ..... 一三五

多摩川 (日本短歌二月號、短歌春秋新年號) ..... 一三八

横須賀 (アララギ三月號) ..... 一三九

芝浦埠頭 (新潮四月號 日本短歌四月號) ..... 一四五

武藏小川町 (短歌研究五月號) ..... 一四九

鶴見臨港鐵道 (短歌研究五月號) ..... 一五四

葛西鹿骨村 (短歌研究五月號) ..... 一六二

犬若海岸 (アララギ四月號) ..... 一六四

春夏雜歌 (アララギ四月號 五月號) ..... 一六五

徳田白楊をかなしむ (日本短歌六月號) ..... 一七二

野菜一 (短歌研究七月號) ..... 一七三

野菜二 (短歌研究八月號) ..... 一七五

鎌倉某氏邸 (日本短歌八月號) ..... 一七七

那須 (經濟往來六月號) ..... 一七九

陸奥 (經濟往來夏季増刊號) ..... 一八二

長谷寺 (アララギ七月號) ..... 一八五

吉野上市 (アララギ八月號) ..... 一八七

丹生川上下社 (アララギ九月號) ..... 一八九

松江有澤山莊 (短歌研究十月號) ..... 一九一

伯耆大山 (日本短歌十一月號) ..... 一九五

那須雜詠 (日本短歌十月號) ..... 一九七

那須雲岩寺 (アララギ十月號) ..... 一九九

磐城に入りて (短歌研究十一月號) ..... 二〇二

戸隠山 (アララギ十一月號) ..... 二〇五

左千夫先生を思ふ (アララギ十二月號) ..... 二〇九  
 虎見崎 (アララギ十二月號) ..... 二一一  
 悼平福百穂畫伯 (文藝春秋十二月號) ..... 二一二

昭和九年

秋青草 (アララギ一月號) ..... 二一五  
 十二月十六日 (アララギ一月號) ..... 二一九  
 この日ごろ (アララギ一月號) ..... 二二二  
 銀座 (帝國大學新聞) ..... 二二四  
 寒き水 (アララギ二月號) ..... 二二六  
 箱根芦ノ湯 (アララギ二月號) ..... 二二九

某日又某日 (アララギ二月號) ..... 二三〇  
 相模走水 (アララギ三月號) ..... 二三三  
 中村老兄を訪ふ (アララギ四月號) ..... 二三六  
 宇治川 (アララギ五月號) ..... 二三八  
 蘭展覽會 (アララギ六月號) ..... 二四一  
 悼東郷元帥 (文藝春秋七月號) ..... 二四三  
 雜詠 (短歌研究八月號) ..... 二四五  
 青葉の家 (アララギ七月號) ..... 二四七  
 四ツ木吉野園 (アララギ夏期歌會) ..... 二四九  
 白濱臨海研究所 (アララギ八月號) ..... 二五一  
 紀勢西線岩代驛 (アララギ九月號) ..... 二五五

北海道雜詠 (短歌研究十月號、文藝春秋十月號) ..... 二五七

空知川上流 ..... 二五七

弟子屈 ..... 二五八

移民村 ..... 二六一

屈斜路湖 ..... 二六三

網走線 ..... 二六五

阿寒湖 ..... 二六七

根室港 ..... 二七一

支笏湖畔アララギ歌會 ..... 二七六

稚内往復 ..... 二七八

福山に至る ..... 二八三

昭和十年

吉野園再遊 (アララギ十月號) ..... 二八六

時雨 (維新創刊號) ..... 二九〇

秩父 (アララギ十二月號) ..... 二九五

中村憲吉氏追悼 (アララギ十一月號) ..... 二九七

多賀城石卷 (日本短歌新年號) ..... 二九九

鹽釜神社 (文藝春秋新年號) ..... 三〇四

山峽徜徉 (アララギ一月號) ..... 三〇五

卷末に ..... 三二七



やすやすと行かむ野もがも若草わかぐさのなごやが中  
に吾こひにけり

新しき地圖を買ひ来て夜ごと讀むいづへの海  
に行きて眠らむ

霜がれし土手の青草のびいでて狂ひし温度今  
日もつづくかも

いろいろの朱墨買ひ来て見せ給ふ君やすくあ  
れしあひだばらくの間

月島

幼かりし吾によく似て泣き蟲の吾が兒の泣く  
は見るにいままし

じれじれて泣きやまぬ兒をつれ出し心おさへ  
て大川わたるまう川下流の昔の跡

青々と海苔つく岸のあらはれし月島に來り子  
供と遊ぶ

亡き父と稀にあそびし秋の田の刈田の道も戀  
ほしきものを

浅草

地下電車にわがふり妻をかへり見ぬ子供をお  
きて出でて來にけり

浅草の午後のひそけき食もの屋妻ともの食ふ  
相むきあひて



映畫館の幕間あかるき吾がそばにわがふり妻  
の居るは安けし  
若き男をみな伴ひささやけり中にひびける吾  
が妻のこゑ

玉川

久しき約束を子等と來りたり玉川は春すぎて  
草立つ

列りて三人の子等が吹き立つる草笛つくる吾  
はいそがし

沙利採機木魂うるさき川原に吾が子供等の叫  
びは徹る

歸り來て子等が吹きなす草笛は街のとよみの  
中にさみしき

某君を弔す

不足せる會費のことを言ひおきて君死にたり  
と知らせを受けぬ

熊本に吾行きし日は見る目なき悪しき病を君  
嘆きけり

有り經つつ吾は染みても思はねば生命<sup>いのち</sup>死なむ  
と吾に言寄す

熊本のあつき町ゆきて受け取りき嘆きつつ君  
がうたひし歌を

## 悼加納曉氏

君が喪に行かむ汽車には終日ひねもすに締切すぎし選  
歌をいそぐ

近江のうみ暮れたる時に食堂車に一人飯食ふ  
仕事の如く

あわただしく昨日立ちたる友二人君なき家に  
つきて居るらむ

い寐がけに酒のみし二人ははしやげり君が酒  
のみしこと言ひながら  
遠く来て君を悲しむといふよりは一つの事務  
をなし居る如し

ありありと棺の中の君ながらゆたかにありて  
逝きしとぞ思ふ

君をいたむ文を作るに文字を忘れ君が机の字  
引をしらぶ

五月十一日雲水寺

去年君がありたるさまを人はいへどいたく明  
るく藤茂りたり

去年の記憶すてにおぼろなり松が枝にとまる  
五位鷺多からなくに

夏來る

あぢきなく來向ふ夏か夜更けて寢息こもれる  
家にかへり來

物の香のこもれる中に子供等は寢並び居りぬ  
その母親も

からうじて肺炎いえてかへり來し幼兒を見れ  
ばヘルニヤ病めり

夜學をへてまだ夕あかり白々しき見附を下る  
心きほひて

めぐり來る父が忌日に故郷に歸らむ暇いとまつくり  
たく思ふ

夏日勞作

暑き日を一日向きあひ勉むれば吾より若き君  
つかるべし

年若き君は一づに勞れ居りしばし晝寐に息づ  
く吾は

ま裸となりつつ暑き午後ひるすぎは山の安居あんごに早くゆ  
きたし

代々木野を朝ふむ騎兵の列みれば戦争といふ  
は涙ぐましき

汗たれて散兵線に伏す兵を朝飯前の吾は見て  
居り

六甲山

六甲山をめぐりて、  
六甲山をめぐりて、

有馬より六甲に吾を伴ひし友等と見たり秋に  
なる山を

海あれて淡路の船の絶えし日に六甲山に登り  
來にけり

草山にゴルフを遊ぶ男女富人がともは樂しか  
るらし

無産主義に吾はあらねど草山はゴルフリンク  
に遮斷されたり

みなり醜き二人の西洋若者は海を見下しかへ  
りて行きぬ

六甲の峰はいづくに盡くるらむ行けば行く先  
の高き草山

むらがりてしげき馬酔木の花房の稚きつぼみ  
を霧はふきすぐ

鶺鴒原

この朝け磯の潮干に鮫を追ふ降り居る雨や秋  
づきぬらし

暗き海は暴風もよひか閉めきりしガラス戸に  
つき當る蛾のおびただし

避暑客のかへれる海に吾は來て吾が幼子と一  
日遊べり

静かなる夜のやどりに氣を張りて話す幼子の  
聲はこだます



海の邊の夏すぎて吾は來りけり蛾の集ふ部屋  
の夜氣ひえびえし（昭和二年のことなり）

嵯峨にて

雨すぎし嵯峨のひるすぎ篁は青々として明る  
かりけり

たかむらの蔭なる苔の庭ぬれて柿青葉せり定  
家卿の墓

苔筵すこし凹める行潦おのづからなせる池は  
澄みたる

白芥子の遠じろき攝津の國を來て雜草あらくさだてる  
落柿舎のあと

小倉山くもりが下の夏嵐椎花の香にわれ酔ひ  
ぬべし

那須殺生石

吹く風は尾の上の草に渡れども谷あつくして  
毒氣うごけり

殺生石は草木たえたる石はらに秋ひる過ぎの  
陽炎は立つ

香に立ちて青草山へ吹き越ゆる石の毒氣をし  
ばらく耐ふ

谷風はときどき涼しく吹き來り青山のいろす  
でに秋づく

殺生石に涼しき風は吹き居りて蟲の死骸しがいの多  
くはあらず

こともなく散りぼふ蟲は死にてあり甲蟲をい  
くつか拾ふ

殺生石の石はら中に水湧けり清々すがすがとして青し  
その蒼

朝日影山にてりつつ谷ふかき殺生石に露なが  
れ居る

石の上に涼しき露は凝りながら吹く朝風の毒  
氣鋭し

高野山安居會

山うるし色づく高野の山寺に暑き日敷を過ぎ  
つつぞ來し

苔の上に熟梅<sup>うれうめ</sup>落ちてにほひ立つひるすぎのや  
やしばらく暑く

佛法僧光をこひてうつらむ月さす時に聲の  
するどし

三寶に聖のころは通ふらむうつつの聲を吾  
はかなしむ

佛法僧いまぞなくなるこの山に再びまゐり來  
しも久しき

吉野 とくとくの清水

高見山見さけつつ來し山道は分れて下るとく  
とくの清水に

吾かつてひとり心にきほひつつ雪ふみて來ぬ  
今日もろ人と

年を経て再び來にし西行庵檜山に新しき道つ  
きにけり

竹林院

水盤に蓮の實ひとつみのりありよき宿にきぞ  
の眠は足りぬ

朝つゆの静けき谷に畑はたけみれば入りて住みにし  
人の思ほゆ

丹生川上上の社

上つ瀬より激ちの水は下つ瀬にやむときもなし  
杜にひびきて

西河に落ち居りし水は細けれどここに轟く丹  
生の水上

下野芦野

暮のつる踏みつけ行けり山の温泉を下り来て  
暑き田の中の道

秋あつき田の面の風の吹きわたる西行の柳は  
いまだ若木なり

八月十六日

目覺めたる曉がたの光にはほそほそ虧けて月の寂けき

暑き夜をふかして一人ありにしか板縁の上に吾は目覺めぬ

ふるさとの盆も今夜はすみぬらむあはれ様々に人は過ぎにし

曉の月の光に思ひいづるいはし人も死にて戀しき

有りありて吾は思はざりき曉の月しづかにて父のこと祖父のこと

空白らみ屋根の下なる月かげや死の安けさも  
思ふ日あらむ

たはやすく吾が目の前に死にゆきし自動車事  
故も心ゆくらし

安らかに月光させる吾が體おのづから感ず屍  
のごと

争ひて有り經し妻よ吾よりはいくらか先に死  
ぬこともあらむ

秋來る

身ひとつを専ら安くと願へるは吾が何時より  
のことにかあるらむ



新聞の記事に名の見ゆるこの人も新なる世を  
かつて論じき

夏休をはらむ頃にゆきにける強き温泉の氣に  
あたりて歸る

秋あつき朝のつとめにいでたればお濠に早き  
鴨ぞ來にける

龜井戸

本所四つ目をすぎ町のきたなさは在りしその  
頃に餘りかはらず

龜井戸の土の汚きたなさうつしたる茶室のみぎりに  
苔わづか青し

二十年<sup>にじふねん</sup>ぶり吾は坐りぬこの茶室に膝をさすひ  
るの蚊のしきりなる

信州山田温泉

斑尾<sup>まだらを</sup>の嶺につく雲の雪につく夕かぎろひを上  
り來にけり

足引の山櫻花ほのぼのと硫黄にごれる澤はふ  
かしも

硫黄にごりてたぎち流るる澤みればみどりか  
なく柳萌え居り

とどろける硫黄の川に細谷の眞清<sup>まじろ</sup>水<sup>みづ</sup>川<sup>がは</sup>が落ち  
入りにつつ

なだれ雪土を被<sup>かぶ</sup>れるあたりには露の臺一尺ばかり  
 かり伸び立ちにけり

こゑ上げて酔ひたる人ら浴み居り其<sup>し</sup>が家妻を  
 言にいひつつ

眞日くれて大湯に集ふにぎはひや鹽魚焙る香  
 の寂しけれ

雪のこる山のかなたの七味湯を心に思へど行  
 きがたきかな

忙しく一夜やどりて足引の山澤羊齒も食ひに  
 けるかも

(以上九首 昭和二年作)

北蝦夷

津輕海峡

罪ありて吾はゆかなくに海原にかがやく雪の  
蝦夷島は見よ

船室に安くあらなくにいでて來ぬ恐山いづち  
四方の雪山

つたひ來しみさきの濱に村盡きて雪かがやけ  
る渡島に向ふ

飛ぶ鳥は雁の如しと思ほゆれ朝日きらひて黒  
黒と飛ぶ

函館五稜郭

青芽たつクロバの原に風鋭し日入りて鎖す  
五稜郭のあと

石狩川

岸ひくき水の親しさ石狩の雪解の時に吾は來  
にけり

ま向ひより落ち來る雪代みなぎらふ萌黄だつ  
柳の川原の中

狩勝峠

山を焼く煙は天にうづまきて春の日光の國か  
ぎりなし

遙かには國の中らを川ゆくか長々として赤き  
くえ岸

はるかに見とほし低き國原のはたての山も雪  
かがやけり

ふりさけて曇れる空かところどころ野をやく  
煙に日はかがやきて

狩勝を下りて久しき國の原山女鮓うる驛にと  
まりぬ

釧路に至る

傾く日にきらふは釧路の國の山か夕ぐれてな  
ほ到りつかざらむ

國土のはるけさ十勝をひねもすに雨ぞふりい  
づ釧路の町なみ

はるばると思ふ釧路の寒き雨にくされし果物  
 並べて賣れり

根室

平かに低き磯島の夕ぐれて雪こごりたる岸海  
 に入る

草山はひくき岬のはてならむ右に左に海の暮  
 れゆく

落石おつちしの入江をすぎてやや久し海に向ひて國つ  
 きむとす

ほがらかに雲雀の聲はうらがなし雪のこる牧  
 場の中空にして

枯原の牧場に動く風ありて帆立貝すてし上に  
立てば鋭し

寒き風吹き來る海の遠く霞みただ淡々し千島  
の雪の

牧場の土とけて荒々しき轍のあと北國遙かに  
ありと思はむ

蝦夷の島ここに盡きて千島の雪の山國くなしり後の島  
は渡りたく思ふ

樺戸

長き年の心足らひか夜行車を曉降りて樺戸の  
道をきく



吹きしまく一ときの風くらくなりて霞はみだ  
る樺戸道路に

石狩の渡の桂くれなるに芽ぐめる下に自動車  
とまる

雪代の水落ちゆきし川岸にたくましき物の芽  
はひしがれぬ

笹原を押しなびけたる残り雪取りて捧げむ遠  
きみ魂に

うららかに照れる春日は雪の原芽立つ胡桃に  
人や偲ばむ

獄舎のあと柳のこむら今ぞ萌ゆる時のうつり  
は心和ましむ

悲しまむ人々さへに亡くなりて久しき時に吾  
は來にけり

うららなる野道を自轉車にて來る僧に此所に  
はてにし人の名をいふ

辛未新春賦

氣がねしつつ子供外套買ひて來し妻をもとが  
めざらむ年の始は

仕事なく我が家に來り年を越す弟は大工とな  
り二十年なり

月給にてくらし居りつつ世の中のよし惡に感  
じの鈍きを思ふ

## 福島竹治郎君を

幼きより一つの道を共に來ぬ今日にはかに  
君を失ふ

君死にて今ぞ思ほゆ幼き友の交り來しは君の  
みなりき

死にゆきし君と幼き目を思ふに吾が來し方の  
はるかなりけり

疎くなる故さと人にただ一人君あることを吾  
は頼みき

## 小坪の濱

家こぞり遊ばむ今日を幼児の一人は病みて母  
とのこれり

小坪の濱の見え來る崎道に幼児はころぶいき  
ほひこみて

磯の崎めぐりてゆけば乾し若布集むるこゑの  
ほがらにきこゆ

春草ののびし坂道上行きて雑木の山は霜の  
こる道

三月三十一日

地下道を上り來りて雨のふる薄明の街に時の  
感じなし

ふりいでし雨の中には春雨とは吾にはうとき  
言葉と思ふ

三月の盡くらむ今日を感じ居り學校教師とな  
りて長きかな

細々とふるは三月の雨ながら寒き夕風のあら  
あらしけれ

睦をとこをんなじくもの食ふ男女を見て食堂に靴の修繕ま  
てり

打ちかへし靴底そぐはぬ舗道ゆき何をか吾の  
食はむとすらむ

いらいらしき心ながらに蘭らんちゆう蟲を商ふ店の池を  
われ見つ

物食ふは吾に楽しき血を瀉し死にたる友の百  
ケ日頃か今日は

樂しみて飽くまで食ふこともなく寒き雨ふり  
て三月はつく

立會川

病おもき友を見舞のかへりにて昔住みたる町  
に下り立つ

吾が借りて住みたる家の前ゆけり息子の代と  
なりて居るらし

この家につつましやかに逢ひにける妻とはす  
でに争ありにき

安けきにつきて住まむとこの町を立ち去りて  
より十四年すぎぬ

乏しき職を得てこの町に住みたりきあはれ世  
にふる今日かへりみる

平凡に吾はあり來し吾よりも出來よき友も多  
く平凡に過ぎぬ

富士見 左千夫赤彦追悼歌會

朗にかがやくさくら山の上に今日來て見るは  
久しかりけり

忙しきわが明けくれはありなれぬ心あくがれ  
む山櫻ばな

にほひ立つ春の若葉も見すぐして四年いたづ  
らに住みし國かも

青くなりし山のうへに雪のかたまりて残ると  
ころはかつて遊びき

此の丘をえらびて歌を石に彫りし人も遙かに  
なりましにけり

春の日の夕べとなりて櫻花擬寶珠のところ  
溜りて散りぬ

寫眞とりてわかれ遊べる人見れば昔の人は少  
かりけり

某日



目を病める人は將棋の半にて晝あつき部屋に  
電燈を點く

老いめしひ筋を誤るこの人の時にきびしき手  
こそさびしき

八月一日

わが妻は蚊帳と布團と買ひて來ぬ今日夏物の  
やすくなれりと

祖母も父も貧しきさまに死にゆきぬ吾は夏布  
團着つつ今夜寝る

ぼろの上をよごして死にし祖母のごと老いゆ  
く時も吾にあらむか

おのづから到らむ老をぼろしきて安らかにあ  
らむ時をぞ願ふ

何を願ひ來し四十年ぞむさぼりて食はむのぞ  
みも淡々として

幼くて育ちし如くぼろの上に老いて安らかに  
あらむ日もがな

屋上栽草

朝日影あつき朝に屋根にいでて心はなぎぬ植  
ゑし山草

物干の上に水培みづかふ山草の色いろのうつろふ時は來  
ぬらし

露しげき物干の上の星月夜子供を寝せて妻の  
來にける

屋根の下に靜なる窓の灯を見れば世のおほか  
たの安らかに見ゆ

己が生よをなげきて言ひし涙には亡き父のただ  
ひたすらかなし

幼きより朗けき世を知らず來て子供に向ふ時  
にけはしく

堪へしのび行く生を子等に吾はねがふ妻の望  
は同じからざらむ

力及ばぬ過ぎにし世をばなげき來ぬ吾が父も  
吾もわが子等はいかに

人悪くなりつつ終へし父が生のあはれは一人  
われの嘆かむ

うつりはげしき思想につきて進めざりし寂し  
き心言ふ時もあらむ

信州靈泉寺

山澤に日に焼けし沙に群がれる蟻地獄をば子  
等にをしへつ

山澤に日に焼けし沙に群がれる蟻地獄をば子  
等にをしへつ

澤水に夕くだり來る赤蛙つかまへ遊ぶ月もい  
でぬかも

けふ一日共に川掘りあそびつつ故郷もたぬ子  
等をしぞ思ふ

## レントゲン診察

刈り伏せし沼の中より清々と伸び出でし蒲の  
幾本かみゆ

しだれ柳青き秋芽はわかやぎて吹きあたり居  
る風のするどし

こゑあげて池に漕ぎあそぶ人のあり吹く秋風  
はしぶきを立てつ

ま日の中歩み來りて腰かけぬ蓮葉衰ふる池の  
はたにて

秋きよき空に吹かれてゆく煙いま更にして今  
日はながめつ

高木村

亡き人の村冬に入る菜の茂り山を見るこそ静  
かなりけれ

おくつきの道はつまづく落葉の上吾が止まれ  
ば来る音なし

こひこひて吾が到らざらむ静けさや照る枯山  
に松の交りて

夏蕨

信濃のおそき蕨を送り來ぬ梅雨に入りて腹を  
病み居る時に

いたく劇しく非難を人に加へてきその人死に  
てたより受けにき

又一人寂しき死をせしことは吾に關はること  
もあるべし

ひとすぢに道理立ててふるまひし若き時思ふ  
悔のみならむや

氣を負ひて若かりし吾をかへりみむ腹をやみ  
て蕨の食へぬ今宵に

さまざまに過ぎにし中に君ありて牦牛兒を年  
年に賜ふ

憤り立ちむかひたりし人さへに安かれかしな  
年は經にけり

松本のことを思へば葱まきて群立ちたりし快  
かりき

## 松本

亡き友をとぶらふ會に集りぬいよいよすこや  
かにあらむ八人

忽ちにすぎにし四人の友はあれど生きてあひ  
合ふもとの所に

ひたすらに思ふらむ友の言ひいづる有りにし  
事を吾は忘れぬ

立ちいづるみ寺の冬日草あをし命ありてぞ遠  
く來にける



夕ぐれの街に見覚えの少くて尋ねゆきつつ寫  
眞をとりぬ

辛未歳晩

職のなくなりし一人の弟は子供とあそぶま晝  
わが家に

引きとりし幼き甥の吾が子等にいぢめられつ  
つ馴れつかむとす

後れたる食事にゆけばあたり居る子供を妻は  
外に追ひ出す

さきつ年人のたびたる煉香を取り出しみれば  
白くかびたり

幾年かおきてかわきし煉香に水うちそそぐ竹筒のまま

煉香をくべて息つぐ仕事には昨日につづき答案をよむ

昨日も今日も坐りつくして夕暮を月島に來れば潮のさるさる

將棋欄見終りたる夕刊に株暴騰の記事よみなほす

圓貨暴落の生活に迫り來るといふは新内閣記事の中にころよからず

日ごと日ごと文字の中に明けくれて街のとよみに心むなしき

遠き代の人の名前を分類すそをだに明日のた  
のしみとせむ

藤原の宮にしらしし古へに吾が子に錢せんと名づ  
けし親あり

うま人はうま人どち富人は妻子を率み吾は焼銀  
杏かひてさげゆく

眞鶴岬

眞鶴まなづるのみ崎の道に霜にあひし楠のひこばえ抜  
きつつぞゆく

暖かき眞鶴村にトマト植ゑてのどかなる父おや子こ  
富めりとも見えぬ

潮干に遊び居たりし女等の歸りには拾ふ松の  
落葉を

吾が友も吾も一日はゆたかなり春ともしるき  
磯の香の中

加賀那谷

那谷寺なやでらに石によぢつつ汗はあゆ遠く遊ぶに若  
葉の照りに

おぼほしき越の梅雨空の山暑く蛙にかかる蛇  
におどろく

山谷の行きのまにまに命足りし古へ人の如く  
今日はあり

伊良湖崎

友ありて遠きなぎさを伊勢の國の見ゆる岬に  
めぐり來にけり

若き友は水瓜を二つ持ちてゆく上衣をぬぎて  
吾はつかれぬ

暑がりて來りし濱に防風のはびこりし葉は衰  
へむとす

しほ氣だつ荒磯の上に眼鏡はづして天てらす  
日はさやかかなり

伊良湖のありその山に飛ぶ鳶のおりてゆきた  
り松山の中にも

真なごより白き貝殻を拾ひけりしばらくにし  
て手にあまるまで

石の上にしてし食物に寄りて来る生物いきものは思ひ  
かけぬ所より

しただみをはさみて食ふ蟹見ればたはむる  
が如くむさぼる

高波は沖さへしろき灘といへど神嶋をみれば  
心やすらふ

あらいそに濁を立つる潮は見ゆ飽き足らぬ日  
をかへる松山に

高野山

雨すぎて高野は涼し晝も夜もつづくる會に吾  
 はただ眠る

雨すぎし日ではいたくさはやかにて高野の  
 山に大根まけり

高野の山に君が家居の廣き庭おこして秋菜を  
 蒔くぞ親しき

とみに涼しき夜半のみ山につれ立てり既に時  
 すぎし佛法僧の話して

大峯の道の口に來て亡き友のほがらかなりし  
 聲を思ひいでつ

草の上に吾が落したる鮎を拾ひ夜半に食ふま  
 で君はもちにき

吉野川清き川瀬に沿ひゆきて日ぐれて夜半に  
歩みつづけき

ありありて天川<sup>てんのかは</sup>べに越えゆかばふたたび君を  
思ふよしあらむ

時事雑詠

時事雑詠の都府の崩き...  
山...  
立...

子供つれて君上海をのがれきぬ恙なくしてい  
たく瘦せたり

幾人か知りたる人の殺さるる目の前に見て君  
はのがれ來ぬ

吾が知れる人も毎日の警備にいたくやつれ  
て居りきと傳ふ



上海のいくさの寫眞今日みるは柳萌えし水に  
兵一人立てり

目の前に亡ぶる興る國は見ぬ人の命のあまた  
はかなき

八十國ハチジュウクニの人の賑ふ長崎にて國籍といふこと思  
ひ見たりき

新しき國興るさまをラヂオ傳ふ亡ぶるよりも  
あはれなるかな

新しき國あらじの主あるじにゆく人の紅べによそほしく立つと  
いふラヂオ

戦争の多き時代に生れあひて安らかにしも吾  
はすぎ來ぬ

戦ひ死なむ時もあるべしと歌ひあぐる吾が友  
を見るは涙ぐましき

若き友二人軍艦に乗り行きぬいたく朗かに行  
きしをぞ思ふ

ラヂオには涙して聞く戦死者のみ名の許多早  
く忘るる

戦たたかひのいさましきニュース終りたり今ぞよぶな  
る戦死者の名を

世の人は早く忘れて永久とことはに忘れえぬ名や母や  
妻等に

國こぞりただ仰ぐなり人三人火群ほむらと燃えて敵  
陣に入る

肉群は火群とたちてただ向ふいづれの國の敵  
かなびかざらむ

大君の榮ゆるみ代に生れあひて國に捧ぐる命  
をぞ見る

久保田健次氏戦報

こともなく君は告げ來ぬはじめて彈丸の下に  
激しくたたかひたりと

ま幸くて戦に君がありにきと思ふばかりに涙  
ながるる

春萌えて朝なほ凍る井の水を汲みつつ君が今  
日もゆくらむ

轉居

移り來し庭に松あり石燈籠ありわれ富人にな  
りたる如し

あなあはれ縁ある家をよろこびて子等はすべ  
れり終ひねり日に飽かず

日のあたる二階の縁はわれ占めてえぞすみれ  
萌えぬ金柑の鉢に

年古りし山羊の毛皮に足のべていたく荒れた  
る撫でつつ眠る

松本にてわが兒の乳を養ひし山羊の毛皮をい  
まに保てり

山羊の毛皮しきねて思ふ翁と呼びし先生の齡  
に吾は近づく

熱海

幼兒を残し置き來て旅やどる妻より先に吾飽  
きぬべし

十年あまり二人あるくは稀なりき海ぎしに下  
りて妻は寒がる

時すぎし梅の園生に遊び來つよびとめられて  
寫眞をとりぬ

若草に落ちたまりたる花の蔓<sup>うてな</sup>あたたかき國の  
春はすぐらし

梅の林すぎてなほ日のあたる谷つり堀があり  
ふみくづされぬ

雑詠

夕かげり春めく空地の瀬戸もの市雨水ためし  
火鉢うとまし

瀬戸ものをつみし空地にホテルより捨てし湯  
ふみ越す夕べあたたかく

春に向ふ夕空なごむ丸の内植木鉢をかひまた  
餡パンを買ふ

四月二十三日萬葉集年表製本成る

歡べるひとりごころに吾が本をみづから讀め  
り終日に飽かず

## 月島

吾が兒と行くはこの頃稀なりき汗ばめる手を  
取りつつぞゆく

手につきて走り従ふ幼兒の植木の話するは甘  
ゆるならむ

新しき建物たちし埋立地めぐりて向ふ夕あげ  
潮に

旗下す舟ぞしづけき川口にきほひ入る潮の中  
淀にして

月島より銀座に歩み来て一皿の西洋料理に子  
は飽き足れり

秋冬雑詠

この日ごろこだはりて物をかきつづけ物いひ  
よわきことぞはかなき

言ひ切りてゆたけき君が文みれば夜半の戸を  
あけ吾はなげけり

子供等の山の温泉に行きしよりほしいままに  
し吾は起き伏す

ひる寝してたまれる汗をふきたれば胸毛はい  
たく白くなりたり



吾が父の老眼鏡をかけたるは今の吾より若かりしと思ふ

妻も子もなき生まを經むと思ひけり友とあそばぬ少年なりき

飽き足りし世のねがひには家をすてし人の收入は幾許いくはくなりけむ

雨ふらぬ一日いちにちの午後にゆきにしが秋枯れそめし山草を買ふ

あつさすぎ息づき青き草もあり亞鉛の屋根のわが植木場に

秋になりていちじるき勞れは胃腸より來るならむ去年もかくの如くなりき

亡き友が形見分ちしセルの着物一枚を寒くな  
るまで着つくしぬ

土をふるひ春咲く花の根を植うる一時だにも  
吾はゆたけし

幾年かねがひし風呂桶を買ひ來り五日ばかり  
はつづけざまに浴む

わが病君こまごまと見給ひぬ安けさに携へて  
植木市に入る

秋風

屋根の上に吹くは野分の風ならむ物干の上に  
吾が息ひつつ

檜鳥のしきりに鳴きし利き聲はいつの頃より  
かきかなくなれり

きぞの夜の一夜の下痢に衰へて屋根にすわる  
はただにしづけし

皆つつましく生きて微妙みまうの樂をきける往生傳  
をあきつつ讀めり

幼くて育ちし家の思はるれこの秋風に日にあ  
たり居て

父の罪に警察に引かれ偽證せし幼き夜の記憶  
は打ち消しがたし

ひたすらに父はかなしき賣りし家に携へかへ  
る夢しばしばにして

## 服薬久し

限られし食物を朝夕にくりかへしあはあはと  
して馴るるにやあらむ

ただ時にむさぼり食ひて樂しかりき再びな  
ることぞとも思ふ

久しぶりに腹のへりたる夜半ながら白湯を汲  
み來て飲みて寐むとす

もの食はぬ今宵に思ふ學生の頃煙草飲み習ふ  
餘裕なかりき

## 逗子にて

さめざめと男に倚れる女子をみなごの見すぼらしけれ  
渚くもりて

病む友を訪ねて寐しより二十年か久しき友に  
は會ひたく思ふ

友もいまだ貧しくて相あそびける浪切なぎりをかけ  
てしきる白波

よる波は岬の同じところにて向きをかへつつ  
白々と消ゆ

二十年前入口を見て過ぎたりし宿にとまりぬ  
いたくさびれたり

年少わかき友と一日の仕事には夕べ勞れて立ちあ  
がりたり

## 城東區

砂村の火葬場近くなりてより葱うゑ漬菜うゑ  
 家居したしき

木場すぎて荒き道路は踏み切りゆく貨物専用  
 線又城東電車

龜井戸大島は吾に親しき名なれども今日小名  
 木川を南に渡る

左千夫先生の大島牛舎に五の橋を渡りて行き  
 しことも遙けし

夕日落つる葛西の橋に到りつき返り見ぬ靄の  
 中にとどろく東京を

夕靄は唯とどろきてうなり立つ蒸氣ハンマー  
の音單調に

荒川を渡り終へて直ちに中川なり二川並みて  
海につづけり

突堤は海にはるかに草かれて冬日の暮に雲雀  
あがれり

靄を渡り來る遠きうなりの親しさよ荒川口の  
夕の潮さゝる

松のある江戸川區より暮れゆきて白々廣し放  
水路口

小工場に酸素熔接のひらめき立ち砂町四十町<sup>し</sup>  
夜ならむとす<sup>じつちやう</sup>

## 日向青島

夜半にして酔ひてたのしき友等より吾は早く  
寐る湯湯婆をいれて

かつて吾が一人來し日をかへり見ればいたは  
られつつ今日は來にけり

夜の海に沖に白々波立つはかつて來し日の如  
くさびしき

此の宿の湯殿はひろげられたるかかつて來し  
時を談りつつ浴む

みなぎれる朝明の海に橋ありて青島に渡る人  
多くみゆ



朝日光海より直ちにさし來りすみれの花も早く咲きたり

吾が友とめぐりて飽かぬ磯のさき沖の白波は集りて來る

たちまちに回り終へて島のみなみがは光の中に葦は冬がるる

吾老いて人に従ふ時あらむ島の在磯に涙ぐましき

鹿兒島

高千穂を天に見しより一谷に白霜ありて大隅へ越ゆ

おびただしき墓石を夕ぐれに見てゆきぬ皆年  
少にして戦死の日を記す

島山の峯の巖に雲すぎて見ゆるはだれのたち  
まちに消ゆ

松本にては宮地教授をうらやみき内藤教授研  
究室ひと時の心しづけさ

ヨーロッパアメリカより君が採集の標本室に  
入り居て思ふ學問の静けさを

自然科学に行くを得ざりし少年時代の境遇を  
顧みるかかる折には

温室に立ちかへり見ぬ殺蟲劑<sup>4</sup>デリスの青くし  
げれるさまを

多摩川

土深く砂利を求めて掘る見れば乏しき國に民  
や育てる

向う岸にほこりを立てて人群るれど西に渡り  
し川原しづけし

浅瀬には砂利採取機のはき出す砂利の小島に  
上りて遊ぶ

横須賀

軍艦は出でたるあとの軍港に春の潮みちくら  
げ多く浮く

静かなる春の潮うしほにボートこぎて聲はこだます  
ドツクの方に

幾隻か灰色の入渠船の後にて赭き建造船にと  
どろく音あり

子供等は浮かぶ海月に興じつつ戦争といふこ  
とを理解せず

午ちかく逸見へみの波止場に集り来るランチの汽  
笛すでに勇まし

三笠艦見つつし思ふ力つくし戦ふはただに功  
利のためのみならじ

國を守りの戦ながらひたすらに生命いのちいきほふ  
はそれのみによし

敵またよく戦ひし跡はしるく残る幾千の命ただに戦ひけむ

此所に戦死の人のあと見れば生き死の吾が觀念の變るかと思ふ

ただに生死のことのみならず戦争をたたへし思想に思ひ及ぶかも

ふり仰ぐ四十サンチの砲門の齊射のさまを君説きて聞かす

初弾命中に國の存亡はかかるといふその時の砲術長を思ひ涙ながるる

艦へる軍艦見れば戦争の勝負は決してありとも思はる

戦をここに決すべき工廠を妻子をつれてしば  
し見物す

列をなし航空母艦を見てあるく小學生等もい  
たのおとなし

春の日の夕日になりし工廠の戦艦のmastな  
ほ酸素燃ゆ

春の日のかぎれる中にひらめきて鐵截る酸素  
の焰きびしき

わが前の若き士官の友のうへに海行く生吾は  
思はむ

芝浦埠頭

肉色の塗いろ褪せし倉庫續き吹き越して來る  
風はするどし

海の陸の響のさえぬ曇ながら海あかるきは春  
になるらし

ただに長き波止場のさきを小蒸氣ゆく細々水  
を吐きすてながら

やや沖の貨物船に舳舟集り居て蒸氣しらじら  
し幾すぢか立つ

夕日落つる一時の間と思ほゆれ海に陸には  
かに動みはしげし

夕潮とかはれる風か砂町の塵芥焼場の煙ただ  
に吹きつく

清々と白くぬりたる帆船はせんにかがやきて沖の夕  
日は消ゆる

セメントを荷役の船の白きほこり倉庫を越え  
て町の方に吹く

貨物線埋立地遠く引き入れて冬を越え青きク  
ロバーも見ゆ

ありありて見ることもなき冬草の青き空地が  
倉庫のかげにあり

武蔵小川町

石積みて白土はくどに碎く工場は麥青き畑に立ちし  
ばかりなり



心太持ちて走りゆく姫あり武藏の國の春を來りぬ

岡の上に仙覺律師の碑をもとめめぐりて空濠の跡にいたりぬ

濠を切り土手を高くし安からぬ世に生きつぎて來しぞ思ほゆ

武藏人わが隣國の心あらく相たたかひてあり經來にけむ

古の人の切りたる濠のあと雜木芽ぶかむ堇ぐさ咲きぬ

安からぬ世にありありて萬葉集一生讀みつつ過ぎけむもかなし

油菜の莖立ちしげき岡こえていま一所仙覺が  
あと見む

洋傘をもちて一日の行き行きに今のうつつぞ  
安けかりける

仙覺が一つの跡の石井の水春早き草の茂りに  
ながる

遠き世のものは残らず町のうちに仙覺が跡と  
いふを二所見つ

枯葉ながら櫟苗買ひかへる人山谷遠くかへり  
ゆくらむ

谷の村なほ深く入る谷ありて山べ山峽かすみ  
こめたり

セメントの山を爆破の山彦は谷々にして分れ  
てきこゆ

山谷に霞を吹ける春のあらし松ある雑木山は  
夕ぐるる

鶴見臨港鐵道

枯葦の中に直ちに入り來り汽船は今し速力お  
とす

船體の振動見えて汽笛鳴らす貨物船は枯葦の  
原中にして

たくましき大葉ぎしぎし萌えそろふ葦原に石  
炭殻の道を作れり

二三尺葦原中に枯れ立てる犬蓼の幹からにふる春  
の雨

大連船籍の船名みれば撫順炭積みて來りし事  
もしるしも

石炭を仕別くる装置の長きベルト雨しげくし  
て滴り流る

嵐の如く機械うなれる工場地帯入り來て人間  
の影だにも見ず

露の臺踏まれし石炭殻の路のへに露の葉若々  
しく萌えいでにけり

稀に見る人は親しき雨具して起重機の上に出  
でて來れる

貨物船入り来る運河のさきになほ電車の走る  
埋立地見ゆ

解体船の現場を示す枯原の道は工場にただに  
入り行く

雨の中に解体船の船橋の捨てあるは運河の對  
岸ならむ

よし切か雲雀かこゑのひびけるは工場地帯の  
休憩時に

おのづから運河をのこす埋立に三井埠頭は設  
けられたり

本所深川あたり工場地区の汚さは大資本大企  
業に見るべくもなし

幾隻か埠頭に寄れる石炭船荷役にはただ機械  
とどろけり

吾が見るは鶴見埋立地の一隅ながらほしいま  
まなり機械力専制は

横須賀に戦争機械化を見しよりもここに個人  
を思ふは陰慘にすぐ

無産派の理論より感情表白より現前の機械力  
専制は恐怖せしむ

群りて蓼の芽紅く萌えいづる空地はすでに限  
られてあり

吾一人ありて歩める運河の岸青き潮干はしば  
しだに見む

## 葛西鹿骨村

花作る乏しき收支を讀みて知りぬのぞき見る  
 温室はガラス曇りて

パンヂーの花の畑に夕風のいたく寒けくひる  
 がへり吹く

夕川に菜を投げこみて青々し春寒き水に人は  
 下り立つ

塵土ちりつちの汚き村楠にうゑて富みたる家は大きく  
 構へぬ

行き行きて目の前に夕暮の土手が見ゆ江戸川  
 堤に行きつきたり

## 大若海岸

枸杞の芽の霜にうたれし巖には食ひすてられ  
し罐が古びぬ

夕日てる岩崩とほく盡きにける海もや立ちて  
白き波見ゆ

巖の上にとざせる家を一めぐりま向ふは東浪  
見のとほき岬か

## 春夏雑歌

事しあれば吾に寄り來るうから等の吾が貧し  
さは思はぬらしき



時すごして縁づき嫁とるうから等に吾が僅か  
なる金はつひえぬ

頼り來し金の出來がたき筋みちをこまごま口  
授して妻にかかしむ

幾たびか生業かへる弟を責めつつ思ふ小僧と  
なりし幼き彼を

吾が父がひそかに病みて悩みしは吾が今ごろ  
の齡なりけむか

おのづから來向ふ春に去年うゑし白根葵の芽  
を今日は見つ

すぎにし日いかりて妻がたたきつけしほとと  
ぎすは庭隅に青く芽立ちぬ

かぎろひの春にしなければ一日だに草の芽うゑ  
て屋根にすごさむ

あはれあはれ吾が屋上に冬こえて山葵の蕾し  
ろくふくれぬ

み吉野の瀧たきの巖いはより採りて來し石菖いすずを幾年いくねんか  
持ちて養ふ

我が妻が半日かけて手入せる石菖いすずに花を待つ  
はたのしき

蘭の香のかそけき部屋にわが居るをいたく不  
調和に妻は感ずらし

蘭の香の夕ぐるるよと思ふ時鯁やくにほひぞ  
物々しけれ

玉川に一日あそびし母と子は枸杞をつみ川砂  
をさげてかへりぬ

父の代よりいりくめる金のいきさつに歸る日  
なけむあはれ故さと

ふるさとの山のたをりは思ほゆれ泡だちたぎ  
つ水をのみにき

子供等に言ひつつ居りて故郷の春の山邊を越  
ゆることなし

山砂のかぐろき中にさやかなる草こそ和ぐれ  
あした夕べに

今朝みれば屋根の上にして駒草に白々むすび  
露ぞおきたる

花すぎし山葵をおろして饑食ひぬ君もつとめ  
よ養生のことは

徳田白楊をかなしむ

五年前あひにし君はわかかりきすこやかにし  
て素直に見えき

ながら経る命はつひにあらなくに年少わかき友の  
死ぬには泣かゆ

亡き母をこひつつ病めるわかき子が雁かりが哭なき  
きて堪へて歌ひき

野菜 一

伊良湖の島の荒磯に採みしとふまつ菜を見れば  
 ばいまだみづみづし

枇杷島の市に見しと言ひしかば君は忘れず  
 まつ菜を給びぬ

君が父まつ菜を持ちて來ましたり志望かへた  
 る君を見むため

歌よみて若き志望を君はかへぬ父母を思へば  
 涙ぐましき

野菜 二

梅雨くもる暑き一日のあしたより露煮るかを  
 り家にこもれり

雪のこる信濃の山の山澤に生ひし露煮る家にかをりて

忙しき仕事のひまを下りゆきて露の煮ゆるはたのしかりけり

答案のこの一綴讀みはたさば露の煮加減見て來るべし

夏わらびほそきをたびぬ信濃の山に六月の雨少かりきと

賜はりし牛尾菜しほでのいたくいためれば青きを拾ふあなをしあなをし

鎌倉某氏邸

山櫻もみづる枝にかげとなる木を伐りて春待  
つ家ぞゆたけき

富み足れる家の庭山のぼりゆき更に富みたる  
ひろき家見ゆ

門の内に谷めぐりゆく道ありて富みたる家は  
見るによろしも

青々と葱をうゑたる家も見ゆ葱うゑし家はす  
がしかりけり

那須

さむき風櫻の花に吹きつけて朝あさ炎かきろひは立てり那  
須野に

芽ぶきたつ春の山べに雷なりて降りたる雹は  
白くたまりぬ

春草に掬ふばかりにたまりたる雹の消えゆく  
束の間を見つ

山の上の雪にかがやく春の日よ汗ながしゆく  
殺生石の谷を

雪のある谷のなだりをおろしくる風は殺生石  
の硫氣を吹けり

殺生石の石原に陽炎のもゆるとき布子をしき  
てしばし休みぬ

湯の花をとる焼石の原なかに清水ながれ虎杖  
の萌えいでにけり



手に持てるりんだうの花かたくりの花殺生石  
に投げ捨ててゆく

## 陸奥

那須山に煙の立てるところ見て白坂白河はは  
やく越え來ぬ

いく所か青葉の澤に人住みて草野いりゆく道  
は見えにき

山澤に田植ゑて人は住みぬるか乏しき竹の色  
づきて見ゆ

夏になるみちのく山に霞みて雪のはだらは暮  
れゆきにけり

城あとに埃あげ人遊ぶ日曜を宿屋に居りて吾  
 は見放くる

ゆきかへり水を渡らふ砂利車見つつし今日の  
 一日すぎぬる

くれゆきし川原に月いでかはづ鳴く世の常事  
 の今のははれさ

みちのくの蕨をもちて夜の汽車にわれは安ら  
 かに眠りけるかも

長谷寺

花きりし牡丹の下に蒔りしける草いきれ立ち  
 西日となりぬ

廻廊の長きに時計響き居り静かに竝ぶ坊のひ  
とつより

きこえ居る初瀬の川の川音に町に木をうつと  
よみも聞こゆ

小泊瀬に谷をへだてて鳴く鳥のしげき鳥が音  
うつりつつ聞こゆ

こもりくの泊瀬より見れば夕風の煙ふきたつ  
大和の國は明るし

吉野上市

めざめたる夜半にしづけき川の音にみじかき  
蛙のこゑしきりなる

くもり夜の月あるごとく思ほゆれしらじらと  
して川遠くゆく

夏山のたむけ越え來つ白雲のおりゐる中にね  
むりたりけり

ふるさとに吾はまづしく生れ來て古き山川に  
今日あそぶかな

夕雲あをすがに青やま清山の見えにしをいづくの山と夜半  
に思ひつ

丹生川上下社

川上の丹生の社に水を飲みこころ静かになれ  
ば去るかな

丹生の川崖の青草うちなびく採り嘆くべき齡  
すぎきや

ま夏日の雲ゐる山を越えぬれば薬草ううる村  
のともしき

白雲の谷の狭間をたがやして老をやしなふ薬  
うゑたり

松江有澤山莊

岐れたる路は澤田に沿ひ入りて青竹の束つかみふみ  
しだきゆく

ややしばらく竹の下道のぼり行けばものぞ静  
けき汗たりながら

油蟬しきりなるなかに一つ二つつくつくほふ  
し聲のすみたる

かわきたる苔の下道秋の蟬は竹の林にこゑ絶  
たずなく

ふるき跡なほ清々と人住みて暮の畑も心にぞ  
しむ

ことそぎし庵のうちに蒸風呂を廣くゆたかに  
作らしめたり

城を高く治めし人の此所に來て蒸風呂にゆた  
かに居りしをぞ思ふ

心あへる家來の家にくつろぎて蒸風呂に入り  
ゆきし人思ひみよ

生ける世の樂しむことを極めたりし人の蹟こそともしくもあるか

古の人のいほりは奢むろの如し時のま心しづかにぞ居る

松さくら古りにし庵にひびきあひてなく蟬涼し庭かわきたり

いほりより見渡す澤田しげりたりみのりよき田の庵に附きけむ

伯耆大山

みちのくの山信濃の山々をのぼり來し學生は大山だいせんを事もなげに言ふ

幾年か前に火にやけほろびたる寺のあとに釣鐘を起しすゑたり

上衣ぬぎなほ頂をさしてゆく人を別れてすみれを採りぬ

雲のまにそぎ立つ頂のいはほ見ゆかの學生のほりゆきけむ

那須雑詠

とどろきて雷すぎにける夜のそらに鳴きゆく鳥を雁かと思ふ

しら雲は月のひかりにうごき居り南月山に黒谷山に



月のひかり雲をてらせる山べより黒々として  
谷の下れる

さやかなる月はひろらに照らせれど八溝あた  
りはすでにかそけし

この宵のとみの涼しさななかまどの黄になり  
し實を房ながら挿しぬ

葱を負ひ山をのぼりてゆく人あり焼山谷に汗  
をながして

那須雲岩寺

われかつて飲みにし道の泉には子供の寄りて  
今日も飲み居る

病む父の薬をもてる少年と語りつつこえき十年ななまへに

今日けふの日に再びこゆる那須野の道十年ととせといふ  
はあはれなりけり

この前は草鞋をはきてこの谷をなほ奥ふかく  
のぼり行きにき

山門の前にさやけき瀬の音のわが記憶よりい  
たく清けし

岩かげに水わき流れ墓ありて苔のむしろはか  
はることなし

みんなん蟬あまた鋭く響ければあはれ衰へて  
つくつくほふし啼く

## 磐城に入りて

常陸より久慈川の水に沿ひ來り川上にして一  
夜寝むとす

町なみをたづねつつ來し宿にして午後の日の  
こる庭はやすけき

庭の上に乾ける夏の落葉さへ安くぞ思ふ早く  
やどりて

狭くなりて残る城跡に相撲とれりやうやく涼  
しみちのくの國も

古堀に菱を藥にとりて居り黄に衰へし葉をか  
き寄せて

蝕める大根をささやかに蒔けるかな貧しき者の  
営みは此所も

桑畑に芥くさりて吾が村に吾が育ちたる頃の  
思ほゆ

桑の下に細々茄子をつくれるは吾が村のごと  
此所も貧しき

山藪のつるの伸びたる叢にさせる夕日も少し  
涼しき

戸隠山

水苔の霜がれ錆びし澤のへに心はたぬし満ち  
足らふごと

山の上に久しき虹のきえゆきて時雨吹く中に  
苔をぞ拾ふ

野生せる犬黄楊いぬわづらの中に生ひ立ちて茂れる苔の  
いたく霜やけぬ

霜がれし草を山水に洗ひつつ芽をいとなめる  
根こそたぬしき

犬黄楊のしげりの下にひとところ青き水苔に  
心はたらふ

苔のなかに青くのこれる山草を拾ひ集めて根  
を洗ふかも

いくたびか時雨の雨はすぎゆきぬ澤水に靴の  
浸みとほるまで

古に生きながら炎に定ぢやうに入りし聖のあとに一  
日苔をとる

古に火定くわぢやうに入りし聖すらに景色よろしきとこ  
ろ求めき

澤水に入りあそびつつ樂しきは幼くて芹をつ  
みし日思ほゆ

枯山のなかに一木の樹つがあをきをりをりに仰ぎ  
苔をぞひろふ

左千夫先生を思ふ

今日の日も紅葉しぐるる山原のいづれの隈を  
君のぼりけむ

前こごみにて足早の姿おもふさへかすかなる  
かな二十年前は

山の上に幾<sup>いく</sup>二十<sup>はたとせ</sup>年はかへるべし落葉の中を今  
日歩みつつ

岩秀よりみぞれの如き雨ちれど落葉日てりて  
とぶ蝗居り

虎見崎

九十九里によるしき波を横ざまに見つつはる  
けし虎見の崎に

九十九里の遠長濱に寄る波の間みえつつゆた  
けくぞ寄る

秋草の草山岬みさきに吾立ちてあはれはるかなり九  
十九里のはては

静まれる沖の風より九十九里に寄せ居る波の  
四重ばかり見ゆ

悼平福百穂畫伯

那須野より久慈の川上とめゆきて君に白河に  
あひしをぞ思ふ

朝ぎりは煙の如くたなびきて山川の温泉に君  
と浴みにき

すこやかに君は浴みて山川の湍たぎらの中に足を浸  
しき



山の上の月をあはれみ時經ぬに君をはふりの  
宵のさやけさ

従ひて入りにし山のいまだ暑く夜半の月夜に  
談りたまひき

歸りますむなしき君を迎へては皆人われもこ  
ゑあらめやも

み葬はなのはてにし夜の風吹きてあはれ幾日の心  
ゆるまむ

秋青草

砂濱に秋の入日に遊びつつ若き男女等ほしい  
ままなる

ほしいままなる人は時代に楽しむか汀の土俵  
けりつつぞゆく

夕日てるみさきの下の岩崩に水泡ただよふ行  
きて見むとす

さはさはと沖に立ちたる夕波のここに寄らね  
ば潮泡ぞわく

枸杞の葉は秋に青々茂りいでておりゆく濱の  
道のしづけさ

みづみづと紅に葉柄のいろづきて桜の太き木  
おとろへむとす

夕山に木をきる音のこだませりこの静かさよ  
忘れ居にける

夕日して諸掘り陸稻をかほこく人の何か故郷のあは  
れがなしき

芝原にらつきように似たる花咲きて丘こゆる  
空氣の中を夕光ゆふひかり來る

落葉かむり堇のたぐひ青々とのびたる畦に時  
久しくをり

下草の秋の茂りをいく年か此のごろ心しみじ  
みと待つ

十二月十六日

よき友にまもらるる今日の幸を心に持ちて左  
千夫先生の墓に來つ

菟さむく低き曇りになづみたる夕べの衢ふり  
いでにけり

汚き町の夕ぐれ墓原にしらじらさびし先生の  
墓は

子規の墓に水をそそぎて苔つかぬ石を嘆きし  
先生を思ひ出づ

心やはらぎ吾はぞ向ふふりいでし雨の墓石に  
したたるまでに

手向けして櫛にかふる馬酔木の枝穂になりし  
蕾に水をぞそそぐ

あはれあはれ吾の一生のみちびきにこのよき  
先生にあひまつりけり

この日ごろ

弟の死にたるも遂に見ざりしが今夜の夜半に  
思ひかなしも

十年前には職をはなれし吾が親子を弟は家に  
迎へくれにき

家をなくし施療院にて死にゆきし弟は吾より  
人に好まれぬ

己が子も養はずなまけし弟は人に好かれつつ  
死にゆきにけり

蘭が欲しと病の如くきざすだにあはれ衰ふる  
吾の意欲か

柳屋が爲替を入れて送り來し今日の短冊はか  
きそこなはず

短冊を三十枚ばかり書き夕ぐれに妻をいかり  
て吾はいでゆく

銀座

ひさびさに銀座あるけばわが日頃時代にうと  
く生くるをぞ思ふ

にぎはへる銀座ゆきつつおのづから吾が感情  
は戦争を肯定す

吾を待ち子供等は告ぐ月を離れ光りきらめき  
し金星のさまを

夕ぐれてかをりをさまる蘭あれば吾はわが家  
を出でず居るべし

みちのくより歸り來む君われは待つ肥えたる  
雉子さげて來たまへ

寒き水

桜の木の落ち重れる荒き葉の苔の上には深山  
思ほゆ

めぐり出でし山田こほりて寒水の落ちゆく音  
のきこえ居るかも

蔓草のあわただしくも霜枯れて藪蘭がただ青  
青と伸ぶ

幾代の人岩を平たひらめし道くだり冬がるる谷の日  
あたりぞよき

この谷に庵もとめし古もありにけむかも竹を  
うゑたり

ゆきゆきて谷の口より吹きて来る風に家畜の  
にほひを感じず

箱根芦ノ湯

湯花澤硫黄の土の山の上に霜がれし虎杖いたどりの根  
を掘りおこす

霜やけし岩南天に日のてりて昨日も今日もあ  
そびけるかも



ポーナスを貰ひ來れる若き友は封筒より幾度も紙幣とりいだす

某日又某日

わが妻が馬肉を買ひて上諏訪の冬をこもりしこともはるけし

となり人疊屋の夫婦肴買ひてむつび語り居りし年の暮もありき

わが妻の遂に生まぬかと嘆かひしその時の感情思ひいだされず

宮益坂下り來りて馬肉買ふ並びて待つに富める人ありや

貧しくなり馬肉を食ひし小説を読みたること  
のありしと思ふ

氣力なきわが利己心はいつよりかささやかに  
しのび身を守り來し

人よりも忍ぶをただに頼みとすわが生よぞさび  
し子と歩みつつ

すみれさいしんの秋の茂りのひしがれて霜立  
つ土手を見たり歸らむ

相模走水

潮干かれて海草青き磯とほしひかり春づく海の  
面に

二日のあひだいそしみし仕事鞆に入れ海のほとりに今日はいで來ぬ

冬こえてゆるぶ思にみなぎらふ海見つつゆく  
老人のごと

鯛あげてうまらに食らひ居るを見きからだは  
たらきて食はむ日もがも

走水はしりの潮干の入江小さければものものし赤く  
塗られたる鐵は

たわやめは恒まつはりのかなしきを海のくぐ  
もりに戀ひ思ふかな

切通の道ゆきて青き冬草を鞆ひらきて拾ひを  
さめつ

## 中村老兄を訪ふ

一昨日も昨日もなき人のことを語りなほ語り  
つづく今日の朝に

病む君を海のうへの家にたづね来て語りてつ  
きずなき人のことは

君が病よろしき今日の日といへど語るにかな  
し人々のうへへ

春の光うしほの上にかがやける海さへかなし  
なき人をいひて

吾がために蘭を見しむと置き給ふ家に覺めて  
思ひはやまず

宇治川

川の瀬は夜半もひびけり明時のしらじらとして響きけるかも

寺庭に池をかへたる泥しきて春のあしたの霜おきにけり

松の葉にふるや淡雪しづくして古きあとをば  
ただにすぎゆく  
暗くなりてふりたる雪のたちまちに河原の草  
にのこることなし  
河のへに草を焼きたる草原にわれ立ちしかば  
降れる淡雪

發電所の水路の水の早くして落ちたぎつとよ  
み止む時なしに

河原にふれるはだれの跡もなく寒き川波ひび  
き絶えずも

いにしへの八十氏河のはやき瀬に吹き散らふ  
雪みるに消につつ

わが前に橋にたぎちてゆく水のすゑ光りつつ  
遙かにぞ見ゆ

橋ゆきて雪みだれたる山に向ふ柳芽ぶきて立  
てりけるかも

蘭展覧會

たくましき老いし肉體をはこび來て蘭に寄れば  
 富める人も靜かに見ゆ

健かに老いて物慾ぶつよくの皺たてる面よ蘭のまへに  
 照り映ゆ

支那蘭の緑かがやく梗くきながし午後三時銀座の  
 高き階上

蘭會場いでつつ思ふ富むころには性慾衰へて  
 ゆく人々など

蘭の香に心しづむること知りて貪り食ひき支  
 那人はいにしへも

悼東郷元帥

かしこきや勅<sup>ひこと</sup>たまはり三代を經し元帥を今日  
かなしみ給ふ

み艦<sup>ふね</sup>三笠に若き戦死者をかなしみき思ひいで  
つつ今日の葬路<sup>はらひぢ</sup>をゆく

今日君をかなしみ行きて水漬きはてにし幾千  
のみ魂思はざらめや

元帥をかなしみ青葉の衢を動きゆく群にぞ交  
る吾が子をつれて

國をこぞり東郷大將にたよりたる三十年前を  
今吾が子に語る

雑詠



襲ひ來る暑さのなかにいち早くすみれの類は  
衰へはてぬ

蘭の芽だち日に日にかぞへ居りにしがそれも  
またすでにものうし

暑さくるしき一日のゆふべ木曾山の太き牛尾<sup>しほ</sup>  
菜<sup>で</sup>を飽くまで食ひぬ

夏わらび汗を流して吾は食ふ友は告げぬ信濃  
も世間うるさしと

腹を病み旅行かむとぞ薬煮つ子供の水筒をか  
りてつめたり

青葉の家

生きのよのたつきの暇をもとめ来て青葉の雨  
の家にめざめぬ

夏かげと茂れる桜の太き木にもろもろの木  
の茂りあひにけり

ふくろふを夜半にききつつ暁の降りいづる音  
に嘆きけるかも

夏大根莖たつみれば君といでて採める野の上  
も茂りたるべし

昨日より讀める故人の原稿を夕方になり鞆に  
しまふ

四ツ木吉野園

ひな芥子の花はすぎつつはびこりて牡丹の花  
壇おほひつくしぬ

藤棚をいづれば照れる日の暑く雑草ゑがく晝  
學生一人居り

雑草のあれたる中にトリトマの樺色の花ぬき  
いで茂れり

花菖蒲衰ふる園にいく種類か西洋花の野生の  
如く生ひぬ

亡き人をこひつつ荒れし園をゆき白髪しろかみきよき  
君にしたがふ

白濱臨海研究所

夕ちかき光にしづく水槽みづがねに水そそぐ氣泡わき  
立ちかへる

さまざまの雲丹たなひの類のあるものは活潑なる運  
動しばしもやめず

タイル白き池に死にたる魚しづみ生きたる魚  
がいくつか寄りぬ

ゆたかにし遊べる魚のおほかたに瘡あること  
を君は示しぬ

てり耀きおよげる魚の眼をみればきずつきて  
白き曇りをもてり

山川やまがはの清きにあそびめぐり來てこの夕かげに  
魚のぞきすも

霧むすび淀める淀も渡り來つ海の空氣に神かみた  
かぶるか

投げいるる死にたる魚を海龜が一刻ちに食ひ  
て濁りを吹きぬ

海龜の吐きし汚き濁り波うろこ散りつつしづ  
まりゆきぬ

紀勢西線岩代驛

岩代へこえゆくものか竹生ふる家のところを  
丘にかかる道

白波の有磯ちかづく岩代驛うめ干ほしぬ匂ひ  
立ち來も

構内の暑き日でりに梅干をほし居る驛を汽車  
はすぎゆく

古のあとは砂丘を切り取りし工事あたらした  
ちまちすぎぬ

海潮のかげりのつよき沖へより寄りつつ清し  
有磯の波の

北海道雑詠 空知川上流

草木の茂りのあらしき澤にして流るる水の細く  
なりたり

虎杖のおどろのあひだに蕎麥まけり空知の川  
の水かみならむ

水かみになほ町をなし住みつきぬとどまらざ  
りし小説を思ひ出づ

雪ぎえの澤水みつつ越えたりきはや五年いっごをす  
ぎにけるらし

## 弟子屈

朝川はみなぎらひつつ霧むすぶ露ある岸ぞ心  
なごましむ

ゆく川は高瀬をたててたぎちゆく捨て湯いく  
つか流れこみ居り

朝かげに空地よこぎるをみなあり光は秋の如  
く思ほゆ

樺の林に温泉は流れしみゆきて草原ははや枯  
れ立ちにけり

この國にアラギ會員ありたりき山草とると  
山にはてにき

山草をあつめし友のなきあとに妻と争ひし君  
がことを聞く

山草を話して一夜ともに寐き君妻としばしば  
争ひきとふ

移民村

新墾の道ひろくして通れども移民の村に家は  
多からず



荒草に馬鈴薯の紫の花咲けり立ちて働く人を見ざりき

木を賣りて移民は賭博はくにふけるといふたときも知らぬ雪ふりつめば

耕作のことを知らざる移民等の入り來ることを聞きしことありき

紫の花の馬鈴薯のまづかりし幼き記憶おもひいでつとも

馬鈴薯の白く咲く花見るだにも早くひらけし村和なごましき

和琴の岬に湖を見て居るに長き蛇いでて石に  
かくりぬ

村人の浴み居る温泉の湯尻にて朝鮮の女一人  
浴み居る

にはとこの實のいち早く秋づきて白々さびし  
湖の舟は

えぞつつじの原よりただに煙立つ硫黄の山を  
見つつすぎ來ぬ

網走線

雲の居る山はいくつか相似つつ汽車はしきり  
に向かはりゆく

水田の中なる驛に下り立ちぬ砂丘をこえて黒  
き海づら

雪のこる一つの山を見わすれて牧場ある沼の  
ほとりとなりぬ

砂丘のかげに停車の長き汽車下りて歩めば風  
の涼しき

牛乳をのみ鯨の燻製を切りて食ひ汽車の中に  
て将棋をさしぬ

たもの林を透かし湖を見つつ居りて網走監獄  
をわれは見たりき

## 阿寒湖

馬鈴薯の畑に劑くすりをかけて居る見えつつ谷はや  
うやくせまし

ライ麥の熟れてなびける原なかにライ麥青々  
と茂る畑あり

ビート畑となり蕎麥の畑となり薄荷畑となり  
つつ荒澤に開墾は盡く

美幌びほろより乗りたる女登山家の二等室に醫科大  
學生等がしきりに出で入る

北見相生の終驛近くなりしかば女登山家は皮  
製登山衣つけぬ

松蘿まがせ白き峠を釧路の國の境にて感傷して言葉  
を發するものあり

女登山家醫科大學生等助手らしき青年一隊と  
なりてホテルに入りゆく

発電所の朝の堰堤えんていをはれがましく女登山家を  
かこみて來る一群

並びたる學生等より丈高き女登山家は第一に  
遊覽船にのりこみぬ

湖の上に蟬の如くにひびきたる舟のこだまは  
長くつづけり

根室港

落石の入江ささやかに波のよる再び見るはあ  
はれなりけり

根室港の港の上の宿なりき朝あけて見れば倉  
庫のならぶ

金刀比羅の祭を見つつ牧場にいで千島風露の  
種子をあつめぬ

リーダーの挿畫の如き牧場を吾は好みて友を  
いざなひぬ

チモシガラスの穂の中を登る丘ありて國後の  
三つの山相はなれ見ゆ

納沙布の岬の方は低くして海が見え擇捉の島  
が淡々と見ゆ

牧草の丘のさきは黒々と闊葉樹林天霧らひつ  
つ海につづくかな

柵あり・牧舎あり鳥なきて聲はこだまに歸ることなし

きこえ居る牛の幾つかの長きこゑ丘を渡りつつ海の上に消ゆ

草の葉は照る日鮮かにそよぎつつ吹きゆく霧の粗きを感じず

吹く霧は水滴すゐてきあらく吹き居りて牧場の丘のとほくまで見ゆ

牧草を畦の如くに刈り伏せぬ残れるところ赤花クローバーにチモシ草秀づ

雪のこる北見の山のあたりより海の上の雲國後につづけり

昨日きのの夕日ぞを見たるあたりの海ならむ遠白く  
光る市街地があり

## 支笏湖畔アララギ歌會

垣山かきやまのしらじらとして秋になる湖につどひて  
楽しきをへむ

樽前たるまへの山よりただに湖に入る荒き澤みて舟を  
かへしぬ

湖の上ゆ吹きくる風はしなの木にしらじらと  
して秋いたるらむ

山の水草の中よりさやさやに落ち居る道を朝  
歩むも



吹く風は涼しく吹きて日のてれる石に湖のし  
ぶきは上る

稚内往復

石狩の國の夕映はてしなく天鹽てしほの國をこころ  
ざしゆく

入日さしかがやく雲にふかぶかとみゆる碧みどりも  
心ひくべし

ほのぼのと朝あけゆきて水を見ぬ天鹽の川か  
海かとも思ふ

青きボート岸につなげる池ありて立つ朝霧の  
水の上に見ゆ

切株きりかぶの高たかき新墾あらに朝居あさりき父ちちと子見こみればあは  
れなるもの

稚内港わっかいみなとに汽車はてたれば下り立ちぬ次の汽車  
にてかへる吾等も

襲襲ひ來る敵あることを信じつつ町の地理をば  
人は語らふ

町を出でてなほ廣々とゆく道のはてむ岬は朝  
霧らひたり

軍用の山の麓を引きかへし朝の市場にしじみ  
賣りて居り

或る時はちさき鴨の仔遊び居る細き流れを草  
原に見き

北見の海荒野をすぎて楡ユナの林に水くむ道も心  
しむかも

虎杖の高きしげりを飽くまでに見つつ經しか  
ど今ぞ秋づく

夕焼のこよひは早くをさまりて樺戸の方に月  
いでにけり

西空に夕月たてる山みれば石狩の國の夜ぞし  
づかなる

福山に至る

苔清水掬びてこゆる峠ゆき松前に至る道は古  
きかも

烏賊を乾し昆布をほしたる幾濱か住みふるし  
つつ貧しく住めり

鳴き立てて烏賊をさらへる鴉ありまひるの空  
にしばし見え居き

梅をうゑ椿をうゑて住みし城ほろびしあとに  
學校たてり

蛸みん螿みんのここに鳴く聞けば北國をゆきつつ日數  
經しをぞ思ふ

海の上に津輕の山のま近なる港はいたく荒れ  
はてにけり

まひる時の濱に火をたき物を食ふ子等は貧し  
く育ちゆくべし

ふるきえぞの松前の濱にをとめ子と貝をぞ拾  
ふ須臾しゆゆのあそびに

吉野園再遊

試験準備にくるしむ幼き夏吉を藤の實しげき  
園につれて來つ

衰ふる園を守れる父と子の手におへぬ夏草し  
げるままに枯れぬ

あらしにて壊れし棚を片づけて青き絲瓜を放  
りなげたり

手入れすみし牡丹も多く枯れたらむ吾が見て  
も拙しこの手入方は

雨水の押し流したる花壇のあひだ何か球根が  
洗ひ出されぬ

藤棚の奥に明るき菖蒲田ありしばらく居りぬ  
蝗こほろぎ赤蛙がとぶに

いく鉢か薔薇の新種をうゑてあれど雨露にう  
たれ衰へ枯れぬ

裸にて働き居りし若者はやがて園内に自轉車  
のりはじめつ

とかげの子の幾匹も幾匹も居るを見つつ夏吉  
はすぐ足をぶよにくはれぬ

百舌鳥の鳴く楓は青きまま衰へてパンパス草  
の穂のみあかるし

距離目測の練習しつつ工事中の國道をゆく夏  
吉と吾と

時雨

あらしの後時雨は國に降りつぎて早くも年の  
寒からむとす

朽ちゆきし物干臺をとり除くと朝より屋根に  
音をたてつつ

幼兒は夜さむざむとふる雨にかへり來りぬ準  
備教授うけて

朝早く机に向ふ幼兒よあかあかと電燈つけて  
起き出でぬ

朝桑を露にぬれつつ吾は摘みき今の幼兒のい  
たく變るかな

貧しき家に生れてつとめつつも吾が頃はなほ  
希望ありたりき

あはれなる幼き努力押し虐げて來る時代をい  
かにかも言はむ

杜鵑ほととぎす草黄なるを見れば物干に時雨の雨はぬれ  
つつぞ降る

衰ふる牡丹に被かぶさる篠竹を一束にしてしばり  
上げたり

貧しき我に關りなき世の變移うつりある夜寢むとし  
て恐れて思ひき



越中の國守大伴家持が跡見むと幾枚か地圖を  
買ひ來ぬ

さもあらばあれ今夜旅ゆき明けむ朝目をさま  
すべし越の海べに

時雨雲下り居る山の青きへにはだれ雪ふる峽  
をしぞ思ふ

秩父

まざまざと影たつ山の峽を來て鳴る瀨の音ぞ  
くれゆきにける

ま日くれし光は高きより來り巖いははのうへに草を  
もとむる

杉むらは早く暮れたる影さして白きたぎちに  
君くんだりゆく

ひといろに草石群いばせのくれはてし岸をいづくま  
でも君のゆくらし

家畑のおち葉のなかにおしなべて青菜はしな  
ふ今朝のつゆじも

中村憲吉氏追悼

この年ごろ立ち入りて談ること多くいよいよ  
頼む心ありにき

よはひ近き君なりしかど相ともに老いて語ら  
むことはかもなき

布野村に聖のごとく老い給ふ君をこころに吾  
はおもひき

よき人の老いていたらむ圓かさにはやく到り  
て君はなきかも

健けき吾のことさへこまごまと計りたまひて  
君はなきかも

多賀城石巻

蘭の苗を植ゑてにどれる小き田の幾枚かあり  
て國道に出づ

多賀城にただちに向ふ刈田の中わだちの跡の  
荒き國道

かめの中に乏しき味噌を賣れるかな荷物をあ  
づけて吾等は歩む

みぞ河に秋の野芹の霜やけて茂れる見れば心  
やすけし

冬の日のくらがり來る碑いしがみの面はいたく墨の染  
みたる

山櫻幾本か立てる老いし木の枝は細かに冬木  
となりぬ

麥生ふる岡に芝生ののこされて多賀城あとの  
黒きいしずゑ

古きあと見つつしゆきて竹植ゑし住みよき家  
のしきりに戀ほし

霜がれし下草に足をとめて見れば常なる草の  
紅葉したるかも

夕日さす牡鹿をの山を見つつゆく水の上には時  
雨ふるらし

島かげに群れ居る鴨を見てしより磯に運河に  
沿いしのみきひ石巻は遠きかも

沿ひて來し運河の水のくれゆきて筵に乾した  
るもの疊まれぬ

にごりつつ二分ふたれゆく夕川を渡りて病める君  
を見むとす

町つきて砂原となりしをち方に海の面の暮れ  
のこるらし

鹽釜神社

鹽釜の浦波光る夕ぐれを上りて來れば池に鶴  
を飼へり

みちのくの山に雪ふる雲みだれ寒き夕ぐれ幼  
き鶴かも

ととのはぬ頭の丹色あはあはし稚鶴は造池の  
水をわたりぬ

山峽徜徉

夕月の光さしつつ荒き水國ふゆがれて一すぢ  
にゆく

水さきを乾ける道に打ちあげて行く用水の光  
りつつ見ゆ

武藏より川を渡りて月しろき河原のみちは上  
つ毛の國

夕星の光れるしたの山みれば吾はぞこふるふ  
るさとの山

あから引く今朝の光に起きいでてあな白々し  
霜ふりにけり

朝鳥の聲なく聞けば櫛の葉も川原もなべて霜  
しろきかな

朝鳥の光みだして立ちぐくを見つつし思ふふ  
るさとにあり

霜とけて光うるほふ川原に細くも水の流れた  
るかも

故里をこひつつ寐ねし朝あけて南甘樂みなみかむらの谷に  
入りゆく

たちちさの霜枯れはてし畑も見きわづかなる  
日南に家をかまふる

冬がれし雑木の山のうちなごみきらへる時に  
日は天づたふ

峡ふかく川瀬の道を入り來り此所もきこゆる  
さやさや瀬の音

川瀬には南の岸に雪あれど竹生あたたかし岩  
に日てりて



いつしかにわが踏む道に雪ありて光かくろふ  
山の常陰とこかげ

山陰に今造るみち石切りて藤の蔓白く引きみ  
だされぬ

墾道に土負ふみれば若きものも苦しみ負ひて  
をのき歩む

道の上に人とかたれば手づくりを吾に賣らむ  
と持ち出して來ぬ

大阪の庫に水浸きし玄米を村こぞりつつ分ち  
食ふといふ

わづかなる山田を刈りて冬草の青きが中に霜  
とけにけり

山の上より光さし來る川隈に藤の莢はせて白  
きしづかさ

自轉車を押して上り來る巡查あり山鳥の尾の  
見えにけるかも

下仁田に越ゆる谷道の分れにてしばし考へて  
又かへるかも

夕かげはいづくも戀し西深き水上谷の一とき  
のいろ

銃の音木魂はしばし谷傳ふあとにうつろにさ  
びし犬の鳴きて

けふのひと日月の光にしづまりていよよ聞く  
べし谷ゆく水音

朝しもははこべの上に消えそめて武藏の國に  
また歩むかも

かうかうと朝の河原の光りたる國の界の橋を  
渡りぬ

鉦うちて朝の道を來るきけば母をぞ思ふあは  
れ吾が母

布施おきてすぎ行きしかば橋の上に稱ふるみ  
名のしばしひびきぬ

三代みよに消えぬつみある家に來りつつ吾を生み  
たる母をぞ思ふ

涙ながしし母さへいまだ若かりき戀ひ思ひつ  
つ峠の道をゆく

北谷の杉の下かげに萬兩の一かたまり青々と  
自生せり

霜がれし畑ありたれば休みたり馬鈴薯をひと  
つ掘りいだしたり

九月二十三日蝦夷地ははやく寒からむ足をく  
だきて果てし君はも

ふた國の山野のどかにゆきめぐりわが四十五  
の年すぎむとす

心ひそかに思ひはやりし日もすぎて吾が生ま静  
かにきまるにやあらむ

西空はいまだ明りてひむがしの紫の空しづか  
なりけり

西山の雪ある山の空にして雲は亂れしままに  
しづけし

夕空に紫色のたなびきて光消えゆくしばらく  
を見む

西山に入る日を見ればふるさとの荒船山の夕  
日思ほゆ

山に入る日は故郷に似たれども雪近くしてま  
うらかなしも

町うらの夕日のあかりに居りしかば炊きあら  
はなる營みも見つ

目の前にけはしき山の谷ふかく終の光と雪し  
ろきみゆ

なかぞらに月てりそめし町うらを枳殻の枝折  
りつつ歸る

朝たけて歩みつつ來れば南みんなみの山大きくして影  
たてるかも

朝かげは麓の方にきらひつつ雪ほのぼのと谷  
になだれぬ

陰なせる谷のあひだに天つ日の日すぢを立て  
て照り下る時

山谷に日光のうつり早くしてかがやきし雪ほ  
のかになりぬ

みんなみの山近くして天傳ふ眞日のかげりに  
谷の雪みゆ

今朝の歩み一里ばかりと思へども日のあたた  
かき草の上に居り

雪ふれる山をこほしくふりさけて見つつし向  
ふ浅山の道に

ゆきゆかば名栗の谷に出づといふ道は雪ある  
山こゆるらし

汗をながして上り來りし峠のうへ清水ながれ  
て村あたたかし

走り井を中なる山の上の村水は流れてわづか  
に田あり

山清水流れて芹の青きみれば故郷にかへり住  
まむ日もがも

心しづかにあるらむ時のふるさとのしきりに  
戀し此の年ごろの

冬の日の芹を求めてふるさとの谷の清水に入  
りし思ほゆ

冬草の青きこひつつ故郷に心すなほに歸りた  
く思ふ

故郷を引きかへし來て武藏の國山野ゆきつつ  
足ると思へや

のぼり來し峠の上ゆふるさとの赤城の山が見  
ゆといふものを



## 山谷集 終

## 卷末に

本歌集に収めた私の作品は、昭和五年から昭和九年まで五年間のものである。即昭和五年刊行の往還集につづくわけである。雑誌等に発表のものに若干の取捨と訂正を加へた。

本歌集の刊行については、多くの人々のはげましと助力を受けたこと、前歌集刊行の時と同じである。別けても、齋藤茂吉氏からは題簽扉等の揮毫をいただいた。五味保義氏、柴生田稔氏からは編輯について重要な注意をいただいた。樋口賢治氏、相澤正氏、黒田龍雄氏からは筆寫編輯校正のことを助力していただいた。又出版についてはすべて佐藤佐太郎氏を煩

はし、組版校正用紙製本等皆同氏の苦心によつた。茲に記して感謝の意を表する次第である。

本歌集の五年間は私に取つては實に繁多であつた。平福百穂畫伯、中村憲吉氏の逝去をはじめとして、記しとどめたい事が多いのであるが、其等はすべて改めて記すべき機会をまつこととした。

昭和十年四月

土屋文明記

(松本製本)

昭和十年五月十五日印 刷  
昭和十年五月二十日第一刷發行

山谷集  
定價壹圓五拾錢

版 權 所 有



著者	土屋文明
發行者	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄
印刷者	東京市神田區錦町三丁目十二番地 白井赫太郎

精興社印刷

發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話(33) 八八七〇番  
八八七〇番  
八八七〇番  
振替口座東京二六二四〇番

目書句俳歌詩行刊店書波岩

幸田露伴著 冬の日の曠野抄 二・三 一〇	幸田露伴著 春の日の曠野抄 二・五 一〇	幸田露伴著 ひさご猿蓑抄 二・二 一〇	幸田露伴著 炭俵續猿蓑抄 二・五 一〇	幸田露伴著 芭蕉七部集定本抄 二・八 一〇	勝峯晋風著 芭蕉全集 四・八 三〇	沼波瓊音編 芭蕉全集 四・八 三〇	小宮豐隆著 芭蕉の研 三・二 二〇	太田水穂著 芭蕉俳諧の根本問題 二・八 一〇	太田水穂著 芭蕉連句の根本解説 四・五 三〇	勝峯晋風解説 去來本奥の細道 四・一〇 八〇	萩原井泉水著 奥の細道評論 二・二 一〇	沼波、太田、阿部、幸田著 芭蕉俳句研究 二・五 一〇
-------------------------------	-------------------------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	-------------------------------------

目書句俳歌詩行刊店書波岩

幸田、太田、沼波、阿部著 續芭蕉俳句研究 二・八 一〇	幸田、太田、沼波、阿部著 續々芭蕉俳句研究 二・八 一〇	山田、阿部、小牧、岡崎著 芭蕉俳諧研究 二・八 一〇	山田、阿部、小牧、岡崎著 續芭蕉俳諧研究 二・八 一〇	山田、阿部、小牧、岡崎著 續芭蕉俳諧研究 二・八 一〇	山田、阿部、小牧、岡崎著 新續芭蕉俳諧研究 三・三 一〇	東松露香校訂 遺稿父の終焉日記 〇・八 四〇	萩原井泉水校訂 句集しだら 〇・九 六〇	佐佐木信綱解説 藤原定家金槐和歌集 一・五 三〇	井手今滋編 橘曙覽全集 二・八 一〇	大島花束編著 良寛全集 五・五 三〇	大島花束校註 良寛歌集 一・二 一〇
--------------------------------------	---------------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------

目書句俳歌詩行刊店書波岩

西原柳雨著 風柳多留講義 (初篇)	鳥木赤彦著 萬葉集の鑑賞及び其批評 (前編)	鳥木赤彦著 歌道小見	太田水穂著 短歌立言	土屋文明編 萬葉集年表	佐佐木信綱編著 分類萬葉集	萬葉三水會編 萬葉集研究年報 (第一輯)	萬葉三水會編 萬葉集研究年報 (第二輯)	萬葉三水會編 萬葉集研究年報 (第三輯)	伊藤左千夫遺著 齋藤茂吉・土屋文明校訂 左千夫歌論集 (卷一)	伊藤左千夫遺著 齋藤茂吉・土屋文明校訂 左千夫歌論集 (卷二)	伊藤左千夫遺著 齋藤茂吉・土屋文明校訂 左千夫歌論集 (卷三)
一・五 一五〇	二・〇 一〇	一・五 一〇	二・二 一〇	三・八 三〇	四・五 三〇	〇・七 四〇	〇・九 六〇	一・〇 八〇	四・三 三〇	四・三 三〇	四・〇 三〇

目書句俳歌詩行刊店書波岩

久保田不二子著 集歌 苦	築地藤子著 集歌 椰子	今井邦子著 集歌 紫	高田浪吉著 集歌 砂	門間春雄著 門間春雄歌集	藤澤古實著 集歌 國	結城哀草果著 集歌 山	土屋文明著 集歌 往	中村憲吉著 集歌 し	鳥木赤彦著 集歌 柿	鳥木赤彦著 集歌 氷	齋藤茂吉・土屋文明校訂 同校訂 左千夫歌集
二・二 一〇	二・〇 一〇	二・三 一〇	一・五 五〇	一・八 五〇	二・六 一〇	二・三 一〇	一・八 一〇	一・八 一〇	二・〇 一〇	二・五 一〇	三・五 三〇

目書句俳歌詩行刊店書波岩

鳥木赤彦編	アララギ年刊歌集第一	(大正十三年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第二	(大正十四年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第三	(大正十五年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第四	(昭和二年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第五	(昭和三年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第六	(昭和四年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第七	(昭和五年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第八	(昭和六年度)	一・一五
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第九	(昭和七年度)	一・一五
茅野雅子著	集金		一・一〇
木下利玄著	木下利玄全集		二・八〇
正岡子規筆	仰臥漫錄	(木版手摺 原本複製)	品切

目書句俳歌詩行刊店書波岩

夏目漱石著	詩漢漱石詩集	附印譜	品切
夏目漱石著	詩漢木屑錄	(玻璃版 原本複製)	六・五〇
夏目漱石著	漱石俳句研究		一・一五
寺田實著	小松宮殿		二・二〇
寺田實著	數藤五城句集	附短歌	一・一五
芥川龍之介遺稿	佐藤春夫編	澄江堂遺珠	二・一〇
島田忠夫著	童謡詩集	柴木集	一・一七
竹尾忠吉著	集歌平路	集	一・一五
太田水穂著	集歌鷺	鵜	二・一〇
齊藤茂吉著	柿本	人鷹	三・三〇
校本萬葉集	(全十卷)	完結	
赤彦全集	(全八卷)	完結	



